

◆ 「祈り」としての文化 ◆



昨年、突然の臨時休校に入ってしまった頃、少しでも穏やかな心持ちになって欲しいとの思いから、このメッセージで、モーツァルトのピアノ協奏曲を紹介したことがあった。晩年のK.595。あれから1年が経つけれど、相変わらず厳しい状況が続いている。

そんな中、『多事奏論』（5月8日付 朝日新聞11面）というコラムを読んだ。

筆者は吉田純子さん。これまでも、様々な音楽関連の話題を紡いでこれ、その都度興味深く拝読していた。最後の方にこんな記述があった。

「文化の本質は祈りであり、ここにいない誰かを思う優しさの集積であり…」

「祈り」・・・、またもやモーツァルトの曲が浮かんだ。クラリネット協奏曲K.622 第2楽章。

彼の死の2ヶ月前に完成したとされるこの作品。抜けるような、それでいて少ししんみりとした青空が思い浮かぶAdagioのその楽章は、クラリネットのSoloで始まり、同じフレーズがTuttiで繰り返される。次に新たなフレーズがクラリネットで提示され、今度はそのフレーズがフォルテのTuttiで繋がる。楽譜が掲載できないのでうまく表現できないのだけれど、天を仰ぎ見るような印象を与えるそのフレーズは、まさに深い「祈り」のように聞こえる。

さて、そのコラムには、このコロナ禍の中で授業がオンラインになり、対面での指導が叶わなくなったある地方の高校の音楽教諭の話題にも触れられ、チェロの演奏会で久しぶりに触れる生の響きに涙をこぼす子どものエピソードが紹介されている。そう言えば、在京のプロオケのコンサートマスターをしている友のベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ全曲演奏を聴いた際にも涙がこぼれたことを思い出した。

本物に触れることで揺さぶられる「感性」を大事にしたい。厳しい状況が続いているけれど、こんな状況だからこそ、心の底からの涙があふれ出るような、そんな機会を多く作ってあげたいと強く思った。